

半世紀を経て

昔々、五十五年足らず前、東映動画という会社で、当時の大監督、内田吐夢さんを立てて、『竹取物語』の漫画映画化が計画されました。結局実現はしませんでした。監督の意向もあって、社員全員からその脚色プロット案を募る、という画期的な試みがなされたのです。選ばれた案のいくつかは騰写印刷のブックレットになりました。

私は応募しませんでした。事前に演出・企画志望の新人たちがまず企画案を提出させられたのですが、そのときすでに、私の案はボツになっていたからです。私は、物語自体を脚色するのではなく、この奇妙な物語を成り立たせるための前提として冒頭に置くべきプロログ、すなわち、月世界を出発するかぐや姫と父王との会話シーンを書いたのです。

原作の『竹取物語』で、かぐや姫は、月に帰らなければならなくなったことを翁に打ち明けたとき、「私は、昔の契り」によって、この地にやってきたのです」と語ります。そして、迎えに来た月の使者は、「かぐや姫は、罪を犯されたので、この地に下ろし、お前のような賤しいものところに、しばらくの間おいてやったのだ。その罪の償いの期限が終わったので、こうして迎えにきた」と翁に言います。

「いったい、かぐや姫が月で犯した罪とはどんな罪で、昔の契り、すなわち「月世界の約束事」とは、いかなるものだったのか。そしてこの地に下ろされたのがその罰ならば、それがなぜ解けたのか。なぜそれをかぐや姫は喜ばないのか。そもそも清浄無垢なはずの月世界で、いかなる罪がありうるのか。要するに、かぐや姫はいったいなぜ、何のためにこの地上にやって来たのか。

これらの謎が解ければ、原作を読むかぎりでは不可解とは思えないかぐや姫の心の変化が、一挙に納得できるものとなる。そしてその糸口はつかめた！とそのとき私の心は

躍ったのですが、半世紀を経て今回取り上げるまで、この「昔の契り」コンセプトは、長年埃をかぶったままでした。

私にはいまま、月での父王とかぐや姫のシーンがありありと見えています。父王は姫の罪と罰について重大なことを語り聞かせています。かぐや姫はうわの空で、父王の言葉も耳に入らず、目を輝かせながら、これから下ろされる地球に見入るばかりです……。

しかし、私はこのシーンを冒頭につけることはしませんでした。『竹取物語』には描かれていない「かぐや姫のほんとうの物語」を探り当てさえすれば、プロログなどなくていい。物語の基本的筋書きはまったく変えないまま、笑いも涙もある面白い映画に仕立てられる。そしてかぐや姫を感情移入させ可能な人物として、人の心に残すことができるはずだ。私はそんな大それた野心を抱いて、「かぐや姫の物語」に取りかかりました。

このような物語に、いわゆる今日性があるのかどうか、ひとつのところ、私にはまったくわかりません。しかし少なくとも、このアニメーション映画が見るに値するものとなることは断言できます。なぜなら、ここに結果集めてくれたスタッフの才能と力量、その成し遂げた表現、それらは明らかに今日のひとつの到達点を示しているからです。それこそ見て頂きたい。それが私の切なる願いです。

高畑勲

11月23日(祝)全国ロードショー

劇場内での映画の
撮影・録音は犯罪です
www.eigaikan.org
0120-550098